

# 航空

## 私の戦争体験

福井県 塚田 對岳

私は昭和十三（一九三八）年三月、当時の福井県今立郡河和田村の河和田尋常小学校高等科を卒業後、軍人に憧れ、とくに大空を夢見る少年であったので、昭和十四年一月の早朝、二十数キロもある雪道を受験のため、鯖江第三十六連隊の兵営まで一人で歩き続けた。この間途中雪道を、櫓こしを引く人一人に会っただけだった。

その念願がなくなって昭和十四年十月、東京陸軍航空学校に第四期生として入校を果たした。日夜

歩兵と同様の猛烈な訓練の連続であった。

昭和十五年九月、同校を卒業、同十月、所沢陸軍航空整備学校電気工学科入校、同十七年九月、同校卒業予定が大東亜戦突入のため五月へ繰上げ卒業になった。東航校の一年間の訓練が厳しかったので、所沢ではわりあい余裕があって学業に進むことができた。

昭和十七年五月、同校を卒業、満州の新京（長春）に到着、各部隊配属の命令を受ける。私らは同期生五人と北支の太原にある独立飛行第九十中队ほか二個中队のある部隊に配属になった。同日陸軍兵長に進級、部隊は下士官と兵隊が数人しかいない留守部隊で、本隊は中支の南昌にて浙贛作戦に参戦中とのことであった。

約一週間程して本隊より前進せよとの命令があり、列車で上海へ、ここから揚子江（長江）を上がり九江まで至り、ここから列車で南昌駅に到着した。迎えのトラックで飛行場まで行く。その道中で見た地上部隊は髪はぼうぼう、この世の者とは思われないような姿で一人二人と後退してくるのを見た時、覚悟はできていたが、これからが戦場だと、武者震いを感じた。

部隊は九九式軍偵（襲撃機）で、地上部隊との協力作戦が主な任務であり、連日の出撃であった。中支は六月頃は雨期で非常に蒸し暑く、このため電気系統の故障が多くて悪戦苦闘の連続であった。使用していた格納庫は中国空軍の重要な基地らしく非常に立派なものであったが、我軍の爆撃により徹底的に破壊され、その残骸が雨露にさらされていた。滑走路も穴だらけ、兵舎も銃爆撃により雨漏れが激しく、寝るところではなく、病気に罹かる者が多くなり、そしてその頃になる

と敵の空襲も激しさを増してきた。

その後、漢口、新郷の飛行場などで二カ月程の協力作戦が終了、直ちに閩東軍に編入され、満州の八面通に移動、その後、海林、牡丹江、東安、ハルビン、ネンチャン等の飛行場にて耐寒演習をかねた実戦さながらの訓練に明け暮れた。

昭和十八年十一月、若干名が選抜されて突然内地帰還を命ぜられた。明野陸軍飛行学校において機種改変（九九式軍偵より戦闘機）のため、私もその一人として入校、明野、亀山両飛行場で二カ月程ずつ伝習教育を受け、二月末終了、昭和十九年三月、再び満州の孫家に渡る。同日陸軍軍曹に進級した。

独立飛行第九十中隊は解散して新しく飛行第二十九戦隊が編成された。日夜猛訓練に励んでいた。

昭和十九年四月、南方軍編入の命があり南方移動で、直ちに出発。我々は海上を途中輸送船の中

で、サイパン島玉砕の報を聞かされた。

サイパン島には、昭和十五年一月徴兵で近衛騎兵連隊に現役入隊した兄上（塚田国富）が、高級参謀閣下と共に、空路昭和十九年二月サイパン島に出陣したことを、私が明野陸軍飛行学校にいた時、家族より知らされていたので、兄上も遂に戦死をしたかと無念と淋しさが込み上げて来た。所沢と近衛騎兵連隊は近いので、一度面会に行き、愛馬も一緒に写真を撮ったのが最後になった。

台湾の風屏に前進、各種の任務に就く。突然中支の武昌に再度渡り、後期航空作戦に参戦を命ぜられ、爆撃機の援護等の任に就く。しばらくして揚子江の左岸にある九江の飛行場にて防空の任に当たる。ここでは敵の優位な電波探知機に翻弄された。二式戦が離陸間もなく目前で撃墜され、揚子江の土手に真っ赤な火を噴きながら二機落とされた。友達のようにしていた戦友を失ったのは悲しいものだ。任務を終え、昭和十九年十一月台湾

の桃園飛行場に帰る。

その頃になると沖縄方面が主戦場になってきた。我が戦隊にも当然特別攻撃隊が編成された。比較的若い空中勤務者が出撃していった。援護機として出撃した人の話によると、猛火の中を何一つ恐れることなく目標に向かって突進していった。実に見事な最期であったと目に涙をため話された。

直ちに比島前進の命が下る。本隊は直ちに出發、私達は台湾に残ることとなった。戦いは我に利あらず、本隊より私に前進せよとの連絡がくるので軍装を整えて申告することができず、後に台中飛行場に移動したが、爆撃により破壊し尽くされ使用不能になったので郊外にある秘匿飛行場にて作戦任務についている間に八月十五日が来た。まだ不安ながらも軍隊としての規律は維持されていた。しばらくして、台中より数十キロ程離れた牧場に移動することになった。

先発隊として、A少尉（特操出身）一人と土士官（私）と兵四〜五人が選ばれて入植することになった。到着して驚いたのは牧場とは名ばかりで、戦場で重傷を負った軍馬が、内臓がとび出し、息も絶えだえの状態で收容されているではないか。馬の病院であった。建物はかなり立派で、二階は物置と牧草が置かれ、これらの取り除きや整理が主な任務であった。

四〜五日程で本隊が到着、復員まで世話になることになった。比較的元気な馬で馬耕をしながら自活の道に入った。

しばらくして、突然、先発隊長であったA少尉の姿が見えない。八方手分けして探したが行方不明である。半ば諦めていたが、数日後、何と遠い元の飛行場に繫留してある飛行機の操縦席に入り、飛行帽、飛行服を着てこめかみに一発短銃により自殺、即死の状態であった。

A少尉は非常に責任感の強い人で、特攻として

散華された同僚に申し訳ないと自責の念に耐えきれず覚悟の自殺であったのではないか。戦隊長以下大変悲しんでおられた。

流言飛語がとぶので山中に逃げて最後の抵抗をと思ったが、説得に応じて一切の武器を中国軍に引き渡した。中国軍は非常に好意的で、進駐してきた将軍が日本軍の参謀に「あなた方は立派な服を着ているね」と苦笑されたとか。

その後、牧場等で自活をしながら昭和二十一年二月末、鹿児島に上陸復員帰郷した。

平成十一（一九九九）年、高年大学に入り、図書室で陸軍特別攻撃隊の本を二冊借りて読んでいるうちに飛行第二十九戦隊の記事があり、今まで戦記物の本を読んでいたが、五十数年前生死を共にしたわが戦隊の記事を目にした時は、しばらく涙が溢れ止まらなかった。

当時の年令で、十六歳から二十三歳まで、青春時代を軍隊で過ごし、命懸けで戦ってきた。今は

老骨に鞭打って余生を送っています。

## 【解 説】

戦争体験記執筆者の塚田氏の所属は、独立飛行第九十中隊で、本隊は中支南昌にて浙贛作戦に参戦中とある。部隊は九九式偵（襲撃機）で、地上部隊と協力作戦が主任務であった。

浙贛作戦は「セ号作戦」ともいわれ、昭和十七年四月十八日のいわゆるドーリットルの日本本土空襲機が、着陸を予定していた衢州飛行場をはじめ浙江省の敵飛行場を覆滅するため、急遽、十一軍・十三軍をもって杭州付近から攻勢、第十三軍・六個師団、第十一軍三個師団をもって、五月末、杭州・南昌付近から攻勢を開始、遠く、衢州、玉山・麗水等の飛行場を覆滅し浙贛線を打通すると共に、軌条その他の各種軍事資材を押収、後送し、八月半ば頃から反転を開始し、九月末に終わる作戦である。

部隊は九九式軍偵（襲撃機）で地上部隊との協

力作戦が主な任務であった。中国軍の格納庫は重要な基地で非常に立派な物であったが、我が空軍の爆撃により徹底的に破壊された。

塚田氏たちは若干名が選抜され、内地帰還を命ぜられ、明野陸軍飛行場で伝習教育を受けた。その後、台中飛行場に移動したが、秘匿飛行場にて作戦任務についている間に八月十五日、終戦の日を迎えた。

まさに、青天の霹靂であったろう。特別攻撃隊が編成され、その援護隊としての航空隊であり、その援護機隊の一員である立場からは、特に軍隊としての規律は維持されていた。

四、五日後本隊が到着し復員まで世話になることになって自活の道として馬で畑を耕作していた。その時、先発隊長であったA少尉が、数日後、或る飛行場にあった飛行機の操縦席で、飛行帽、飛行服を着て、短銃により自決していた。このようなことが各飛行場において行われていた。

特攻として散華された、同僚・後輩に対し「申

し訳ない」との自責の念に耐えず、覚悟の自決であつたろう。少尉の死に対し、隊長、同輩、部下は大変悲しんでおられたという。

この少尉の死を見て、あるいは流言飛語の飛ぶ中で、山中に入って最後の抵抗をと、筆者も思ったというが、当時、あの環境の中では、ほとんどの者が、抗戦・自決を一度は考えたと思う。

終戦後の抑留生活、特に、中国においては、好意的な待遇であつた。終戦翌年、鹿児島に上陸・復員・帰郷したというが、当時の年令、十六歳から二十三歳まで、青春時代を軍隊で過ごした体験は、恐らく、終生忘れ得ぬ体験であり、この体験こそが、敗戦後の日本を現代の平和日本に仕上げたと思う。

## 忘れ得ぬ飛行兵の思い出

愛媛県 保田基一

忘れ得ぬ昭和十六（一九四一）年十二月八日未明に、真珠湾攻撃で大東亜戦争の口火が、きられた。当時、私は旧制愛媛県立吉田工業学校の電気科三年の時であつた。

毎日毎日、海軍航空隊の戦果が勇ましく報道され、ハワイ真珠湾からマレー沖海戦ではイギリスの超弩級ちやうどきゅうの東洋艦隊の戦艦を二隻撃沈するなど、こんな威力ある海軍航空隊の軍人とは、どんな人たちかと少年期の私は非常に関心をもち、飛行機乗りを熱望するようになった。

ちょうどその頃、町役場に海軍甲種飛行予科練習生募集のポスターがあつたのを思い出し、早速調べた。その結果、中学校四年一学期終了程度の学力が基準とのことで、後の半年間で学科を勉強